



2019 Summer Indonesia Camp Camp Report



Prologue

この報告書では、より多くの人にキャンプの良さを伝えられるよう、東海と九州の FIWC が共同で作成する。

まず、はじめに情報の正確さ。これは私たちが生活をする上で必要不可欠である。誤った情報を信じ、どれだけの人がされなくても良い差別を受け、傷ついたことであろう。ハンセン病に焦点を当てて考える。例えば、日本ではハンセン病が人から人へうつるものと考えられていたため、隔離政策のための法律が作られた。そしてインドネシアでもうつる病気であるという誤った情報を信じられているからこそ、実の親に捨てられ、妻になるであろう人と結婚できない。このような悲しい現状が生まれてしまった。

私たちはハンセン病後遺症の人々が共に生活をするインドネシアのドノロジョという村に約 3 週間滞在した。そこでのキャンプで私たちは何を学び、何を発信したいと考えたのかをこの報告書のテーマとしたい。

2019 年夏 Donorojo WorkCamp メンバー

加藤葉月・松浦実咲・山内未有・後藤ヒカルアイニ・久保田奈優・東村俊輔

久保海晴・久保山亜美・上田涼介

Contents

1. Prologue~はじめに	2
2. About Leprosy~ハンセン病とは	3
3. About Indonesia Camp~インドネシアキャンプについて.....	6
4. About Donorojo~ドノロジョ村について	8
5. Camp Schedule~キャンプ日程	10
6. Work Project~ワーク	11
7. Home Visit~ホームビジット	15
8. Member Profile~キャンパー紹介	17
9. Feelings~感想	22

About Leprosy

皆さんはハンセン病のことについてどれだけ知っていますか？

初めて聞いた、聞いたことあるけどよくわからない...

ハンセン病についての説明の前にいくつかの○×問題を出したいと思います！

1. ハンセン病は遺伝病である。
2. ハンセン病は治らない病気である。
3. 感染力が強い病気である。
4. 治療薬は無料である。
5. ハンセン病患者は隔離されなければならない。

どうでしたか？

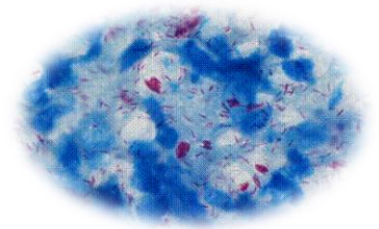
分かった方もわからなかった方も次の説明を読んでいただき、ハンセン病に対する知識や偏見をなくしていただけたらと思います。

答えは最後に載っています。

～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～

● ハンセン病とは

- ・人類の歴史上もっとも古くから知られ、恐れられてきた病気の1つ
- ・らい菌と呼ばれる菌が主に皮膚と神経を侵す慢性の感染症
- ・後遺症が目に見えるため、昔は「不治の病」などと言われていた



！しかし！

- ・治療法が確立された現代では完治する病気
- ・1873年にらい菌を発見したノルウェーのアルマウエル・ハンセン医師の名前を取り、ハンセン病と呼ばれるようになった

● 症状

- ・ 菌の潜伏期間は約5年
- ・ 初期症状は皮膚に現れる白や赤、赤褐色の斑紋、感覚喪失、など
- ・ 末梢神経の麻痺により指や足を切断しなくてはならなくなる



斑紋（後遺症となる）



末梢神経の麻痺により切断
（後遺症となる）

● 治療薬

大風子油（～1940年）

- ・ インド原産の大風子の種から作られた物で筋肉注射として使われていた
- ・ 注射時の激痛、症状が再発しやすいなどの問題あり



プロミン→ダブソン（1943年～）

- ・ 静脈注射から錠剤
- ・ 日本には1948年から導入
- ・ 単独使用によるダブソンに対する耐性菌の発現が確認





そして...

多剤併用療法 (MDT) (1981年～)

- WHOの研究班により、2剤または3剤全てを併用する治療法
- 最も効果的で再発率が低い、安全で服用方法が簡単
- 病院に行けば無料で薬をもらえる



- | | |
|--------------------------|----------------|
| 1. ハンセン病は遺伝病である。 | →× (感染症) |
| 2. ハンセン病は治らない病気である。 | →× (治ります) |
| 3. 感染力が強い病気である。 | →× (風邪よりも弱い) |
| 4. 治療薬は無料である。 | →○ |
| 5. ハンセン病患者は隔離されなければならない。 | →× (隔離する必要もない) |

● インドネシアのハンセン病事情

インドネシアのハンセン病患者数は、インド、ブラジルに次いで世界第三位です。2000年に制圧を達成したものの、患者数は減らず、ほぼ横ばい状態。ハンセン病にかかっていることを自覚していない“隠れた”患者も多いと言われています。実際、新規患者の発見活動に同行した村では、わずか1時間半の間に3人もの患者が発見されました。

インドネシアでは今でも多くの島々で、差別や偏見が色濃く残っています。たとえ病気が完治したとしても、学校や職場に戻れなかったり、家族と離れて暮らすことを余儀なくされたりする人が少なくないのです。「ハンセン病患者・回復者」というスティグマ（負の烙印）を押され、その後の人生を生きていかなければならない。これが島国インドネシアの“現実”です。

日本財団 ハンセン病制圧サイト (<http://leprosy.jp/movie/indonesia/>) より

社会には「ハンセン病=呪い」といったイメージが浸透しており、治療が終わった後も故郷で生活するのが困難な状況にあり、約60近くある快復村で生活をしています。

右表：世界のハンセン病新規患者数，2016年

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/id/712-disease-based/ha/leprosy/idsc/iasr-topic/7827-456t.html> より

表. 世界のハンセン病新規患者数, 2016年 (1,000人以上, WHO)

国名	新患者数	国名	新患者数
インド	135,485	ミャンマー	2,609
ブラジル	25,218	タンザニア	2,047
インドネシア	16,826	マダガスカル	1,780
コンゴ民主共和国	3,765	フィリピン	1,721
エチオピア	3,692	ナイジェリア	1,362
ネパール	3,054	モザンビーク	1,289
バングラデシュ	3,000	世界合計	214,783

スリランカ: データなし (2015年は1,977人)



About Indonesia Camp

● インドネシアキャンプについて

インドネシアキャンプは、FIWC 東海委員会とインドネシアの学生団体である“LCC” (Leprosy Care Community) がインドネシアのハンセン病快復コロニーで活動を行っています。

インドネシアキャンプは、3つの村で行われています。ナンガット (Nganget) 村、ドノロジョ (Donorojo) 村、Sumbleglagah (スンプルグラガ) 村です。私たちはドノロジョ村に行ってワークキャンプをしました。そして今回のインドネシアキャンプは初の試みである FIWC 九州委員会と東海委員会の合同で行いました。



● どうやってコミュニケーションをとるのか？



インドネシアの村人は、インドネシア語、もしくはジャワ語しか話せません。ですから、私たち日本人の中にインドネシア語で会話をできる人は少ないです。ですが、LCCの学生たちは英語を話すことができます。だから、私たちが村人に聞きたいことがあれば、英語で学生たちに伝えてもらいたいことを言うと、彼らが村人に翻訳して聞いてくれます。

また、インドネシア語を学生たちに教えてもらうことができ、しばらく村人と一緒に生活したり、会話をしたりしていると、インドネシア語を覚えることができます。最初は言語に関して不安に思うかもしれませんが、すぐに慣れるので、心配しなくても大丈夫です。

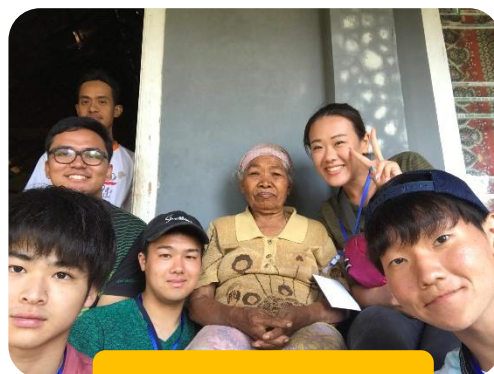
● インドネシアキャンプではどんなことをするのか？

主な活動は2つです。



Work Project

- ・今年度のキャンプでは、**水路の建設**を行いました。
- ・ワーカーさん、村の方々と協力しながらワークを進めていきます。
- ・詳細は 11 ページへ！



Home visit

- ・現地に行って、直接村人たちにハンセン病についてのお話を聞いたり、村人と一緒に生活をしたりします。
- ・詳細は 15 ページへ！

● 村の滞在以外にも

村の滞在を終えた後、現地のインドネシアキャンパーとスマランやジャカルタを観光しました。

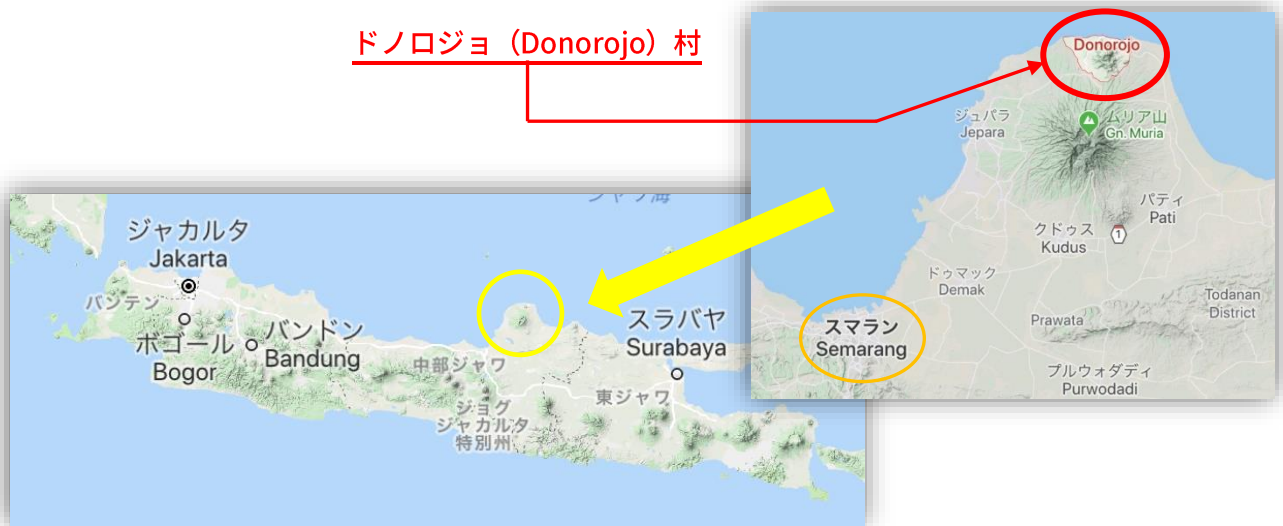


About Donorojo

● ドノロジョ村とは

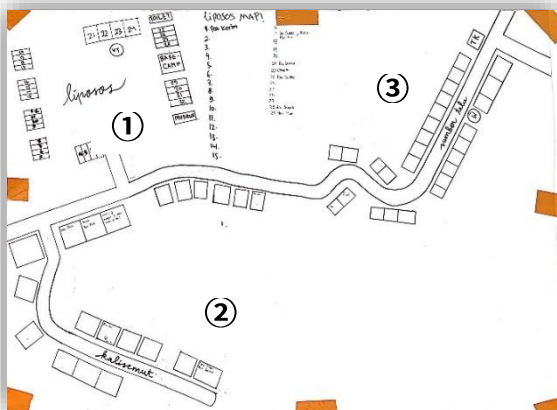
ドノロジョ (Donorojo) 村は、インドネシア共和国ジャワ島中部ジャワ州ジュバラ県にあるハンセン病快復コロニーです。ジャカルタからスマランまで電車で約7時間、その後バスに乗り約5時間で到着します。

ハンセン病快復者とその家族、約800人が生活しています。過去にハンセン病を患った方々の多くが足や手などに後遺症を抱えていますが、お互いに助け合い、とても元気に暮らしています。



● 3つの集落

ドノロジョ村のコロニーはLiposos (図①)、Kalisemut (図②)、SumberTeru (図③) の大きく3つの集落に分かれています。Lipososは政府の援助がある地域、KalisemutとSumberTeruは土地のみが与えられる地域、など集落により援助の差がありました。今回のキャンプでは、3つの集落すべてでHome visitを行いました。

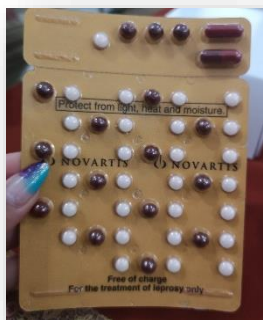


● 病院について

ドノロジョ村には大きな病院があります。病院ではハンセン病の治療を行っているだけでなく、ハンセン病快復者が生活する寮もあります。今回のキャンプでは病院への訪問も行いました。

2019年8月12日(月) キャンパー全員での訪問

ハンセン病についての話を聞かせていただきました。実際に治療薬を見せていただいたり、病棟、義足製作室の見学をしました。



それ以外にも、、、

何度も病院を訪問し、沢山の方と交流を行いました。



Camp Schedule

● キャンプ前 [事前 MTG]

- 2019年6月11日(火) 18:00～ 第1回 MTG
- // 6月18日(火) 18:30～ 第2回 MTG
- // 6月25日(火) 18:30～ 第3回 MTG
- // 7月2日(火) 18:30～ 第4回 MTG
- // 7月9日(火) 19:00～ 第5回 MTG



● キャンプスケジュール [Donorojo 村滞在中]

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
8/4	5	6 FI 東海到着	7	8 FI 九州到着	9 移動・村到着	10 Mapping
11 Home Visit	12 病院訪問・Work	13 Work & Visit	14	15	16	17
18	19 Work 完成!	20 島観光	21 Farewell Party	22 Clean day	23 観光・移動日	24 観光
25 インネシ出発	26	27 九州・東海着	28	29	30	31

● 一日の流れ [Work & Home Visit の日を例に]

時間	活動
5:30～6:00	起床
6:00～6:15	朝の体操
7:00～7:30	朝食
9:00～11:30	Work & Home Visit
12:00～12:30	昼食
13:30～16:30	Work & Home Visit
16:30～19:00	風呂など
19:00～19:30	夕食
19:30～20:00	Meeting
20:00～	自由時間

* KP (料理係) を交代制で決める。

KP は料理、ワークをするキャンパーへの差し入れ作り、ベースキャンプの掃除を行う。



インネシキャンパーと料理！！

Work Project

ワークでは、雨がたくさん降る雨季にむけて、雨水の通り道になる水路をつくりました。道の路肩の崩れている部分を掘り起こして、土壌・石・セメントをうまく利用してつくりあげました。

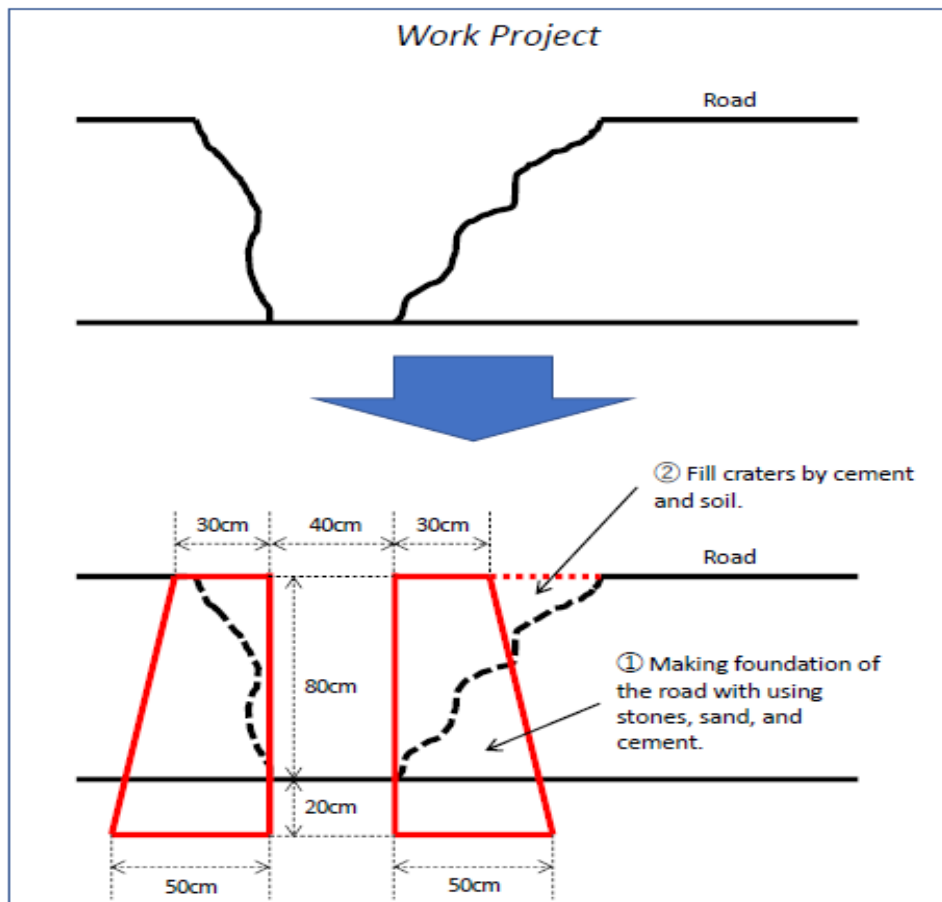
before



after



● ワーク概要



● ワーク工程

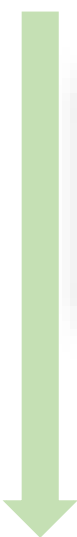
- ① 溝に落ちているごみや砂利を取り除いたあと、竹の棒、ひもを使って水路の路となる部分の長さを測り、地面との高さを合わせる。



- ② 使えそうな石を路肩に運ぶ。



- ③ 土とセメントを水を加えながら混ぜる。



④ つくったセメントはバケツにうつして、ひたすら運ぶ！



⑤ 石と石の隙間にセメントを埋め込みながら、石を積んで積んで積んで………。



⑥ 水路と道のくぼみを土で埋めて、水路の表面をセメントでならしたら……



⑧ 完成！！ 最後にキャンパー全員の名前を彫ったモニュメントを製作しました。



● ワーク総括

このワークで大事なことは、村人との交流を大事にしながら作業することです。キャンパーだけで作業するのではボランティア活動にはなりません。わざわざ活動費を払って現地に赴く費用があれば、プロの大工さんを雇う方がより正確で、短期間で終わることができます。わざわざ自分たちが現地に足を運んでワークをする。そのようにするにはつまり、村人とともに協力することに意味があるのです！（文責：しゅんすけ）



Home Visit

● ホームビジットとは

私たちの活動には、ホームビジットがあります。この活動は少人数のグループに分かれて行動していました。ホームビジットは村の方々のお家へ行って交流を深めたりする活動です。長時間滞在するわけではなく、いろんな方のお家に行ったりします。私たちは最初に村の地図を作ってから、どこに誰のお家があるかを把握して、訪問していました。村人の方と交流することによって自国の文化や歴史、家族の話ができました。

● ホームビジットの流れ

- ① **マッピング**：ホームビジットで使用する地図の作成。インドネシア人キャンパー、日本人キャンパー全員で村を歩いて回り、作成していく。村は広いが、地図を作ることによって、どの家を訪問したか、だれが住んでいる家かを確認することができる。



- ② **ホームビジット**：実際に村の方々のお家を訪問する。お話を聞いたり、お手伝いをしたり、ご飯やお菓子をもらったり。

● ホームビジット総括

私が一番驚いたのは村人のホスピタリティです。そもそもお家にお邪魔すること自体ありがたいことですが、「いっぱい食べて」と言って食べ物をいただきましたし、「ゆっくり休んでね」「体調は大丈夫？」とたくさんキャンパーを気遣ってくれました。おかげで心温まるホームビジットができました。私たちは村のお家をまわるだけでなく病院も行きました。インドネシアの皆さんは、去年のキャンパーのことを話してくれました。毎回私たちが来ることを楽しみにしてくれているのでこの繋がりを決して途切れないうようにまたこの活動ができればと思っています。(文責：アイニ)



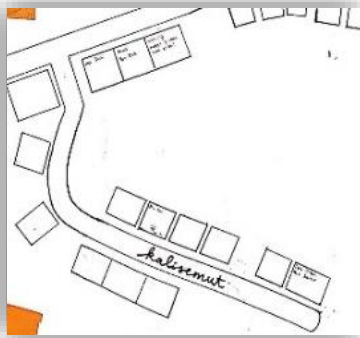
● Home Visit Gallery

ここでは、実際にそれぞれの集落でのホームビジットの様子を写真で紹介します。

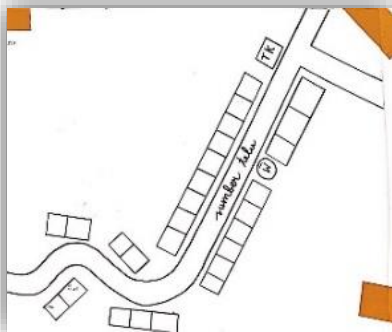
Liposos



Kalisemut



Sumble Teru



Member Profile

	<p>③キャンプでの印象 みんなのリーダー！ 誰よりも楽しんで活動して、村人に1番覚えられてた！！</p>
<p>①名前・ニックネーム</p> <p style="text-align: center;">加藤葉月・はづき</p>	<p>④頼りになったところ</p> <p style="text-align: center;">ワークもビジットもなにもかも 全部！</p> <p>⑤その人の好きなところ</p> <p>普段クールなところと楽しそうに笑ってるときのギャップ(笑)</p>
<p>②性格</p> <p style="text-align: center;">めちゃくちゃしっかりしてて優しい</p>	<p>⑥一言 (by しゅんすけ)</p> <p>みんなをまとめてくれて、ありがとうございました。はづきさんは間違いなく今回のキャンプ成功の立役者です！GLお疲れ様でした！！</p>
<p>③キャンプでの印象</p> <p>日本人だけでなく、インドネシアキャンパーともたくさん話していた</p>	
<p>④頼りになったところ</p> <p>英語力が高い上に行動力があるので、疑問点があったらすぐにみんなに聞いてくれてとても助かりました。</p>	<p>①名前・ニックネーム</p> <p style="text-align: center;">松浦実咲・みさき</p>
<p>⑤その人の好きなところ</p> <p style="text-align: center;">きさくに話しかけてくれるところ 落ち着いた雰囲気</p>	<p>②性格</p> <p>優しくて頼りがいのあるお姉さんの存在！ 誰とでも仲よくなれる。落ち着いている</p>
<p>⑥一言 (by あみ)</p> <p>初めて会った時から楽しく話せてとてもうれしかったです！キャンプ中もとてもお世話になりました！また会いたいです！</p>	

	<p>③キャンプでの印象</p> <p>黙々と働いていた！！</p>
<p>①名前・ニックネーム</p> <p>山内未有・みう</p>	<p>④頼りになったところ</p> <p>何を言っても返事をしてくれました</p>
<p>②性格</p> <p>素直？</p>	<p>⑤その人の好きなおところ</p> <p>雰囲気</p>
<p>③キャンプでの印象</p> <p>食べる！寝る！元気！</p>	<p>⑥一言 (by なゆ)</p> <p>キャンプ中お世話になりましたー</p>
<p>④頼りになったところ</p> <p>ユーモア・素直</p>	
<p>⑤その人の好きなおところ</p> <p>天然だけどしっかり者 好奇心旺盛</p>	<p>①名前・ニックネーム</p> <p>久保田奈優・なゆ</p>
<p>⑥一言 (by 葉月)</p> <p>来年もキャンプ行こうね！！！！</p>	<p>②性格</p> <p>おっとり・天然</p>

	<p>③キャンプでの印象</p> <p>褒め上手！頑張り屋！</p>
<p>①名前・ニックネーム</p> <p>後藤ヒカルアイニ・アイニ</p>	<p>④頼りになったところ</p> <p>インドネシア語話せる天才</p>
<p>②性格</p> <p>年下だけどお姉ちゃん</p>	<p>⑤その人の好きなおところ</p> <p>可愛い、おしゃれ</p>
<p>③キャンプでの印象</p> <p>活動に積極的だった。村人やキャンパーと、とても仲がよく、社交的だった。</p>	<p>⑥一言 (by)</p> <p>写真の撮り方教えて</p>
<p>④頼りになったところ</p> <p>水路建設などでの力仕事するとき、率先して、活動していたところ。</p>	
<p>⑤その人の好きなおところ</p> <p>優しくて、面白いところ。</p>	<p>①名前・ニックネーム</p> <p>東村俊輔・しゅんちゃん</p>
<p>⑥一言 (by りょうすけ)</p> <p>この活動を通して経験したことを、今後活かしていってください！</p>	<p>②性格</p> <p>思いやりがあり、真面目。</p>



③キャンプでの印象

誰よりも率先して挨拶をされていて、言語の壁を突き破ってコミュニケーションが取れる方でした

④頼りになったところ

フェアウェルパーティでは司会者をインドネシア語でしてくれました。みんなのために行動できる姿はカッコよかったです。

①名前・ニックネーム

久保海晴・かいせー

⑤その人の好きなおところ

次の目標をいつも持っているところ

②性格

お兄ちゃん的存在で頼れる存在！

⑥一言 (by あいに)

7時間もの電車の移動の中私たちだけは睡眠をとらずにずっと会話していました。コミュカの高さと優しい心に感動しました。

③キャンプでの印象

親しみやすいけど、礼儀正しい！



④頼りになったところ

常識人なおところ

⑤その人の好きなおところ

人に素直になれるところ！

①名前・ニックネーム

久保山亜美・あみ

⑥一言 (by みう)

趣味があう！ピアスつけてるよー

②性格

元気、笑顔が素敵

	<p>③キャンプでの印象</p> <p>圧倒的成長！！ 潔癖症から外で寝られるくらいまで成長した。</p>
<p>④名前・ニックネーム</p> <p>上田涼介・りょうちゃん</p>	<p>④頼りになったところ</p> <p>ヤティおばさんとの関わり方 あんなに好かれてずるい。</p>
<p>②性格</p> <p>クール&ピュア</p>	<p>⑤その人の好きなところ</p> <p>たまに見せる笑顔！</p> <p>⑥一言 (by かいせい) 同じ九州勢として、キャンプ初めからずっと頼りにしていたよ！りょうちゃんの楽しそうな姿、素敵だった！1か月ありがとう。これからもよろしくね。</p>



Feelings

Hazuki

東海委員会からすると今年のキャンプは例年とは違った形で行われました。それは、九州委員会との合同キャンプです。また、私はこのキャンプでGLいわゆる総リーダーをやりました。インドネシアキャンプ経験者は私一人という過去にないことで、大丈夫かなと行く前から不安だらけでした。

そんな不安な中、キャンプが始まったわけですが、初日の移動では朝5時ごろに出発し約5時間電車に乗り、その後エアコンのついていないバスに揺られて約4時間で村につきました。ベースキャンプ（キャンパーが寝泊まりするところ）についてすぐに村人たちは待っていてくれて、笑顔で迎えてくれました。こんなに温かく迎えてくれる村人と一緒に2週間過ごせると思うと、ワクワクしていました。着いたその日にさっそく村人のバイクに乗って村の外へキャンパーの夕食を買いに行きました。村人は去年の日本人キャンパーの名前を連呼して、「なんで今回来てないの?」「みんな何しているの?」と去年の日本人キャンパーのことをすごく気にかけていました。それを聞いて私は、去年のキャンパーに負けなくらいたくさん村人に名前を覚えてもらって、来年になっても再来年になっても覚えてもらえる存在になれるようにしようと心に決めました。

キャンプについての初日の午前中は村を回って挨拶し、午後はさっそくホームビジットが始まりました。その日は村人と一緒に海に近い田んぼへ行き、田んぼの周りの雑草狩りに行きました。

次の日からは、グループに分かれてワークとホームビジットが行われました。ワークでは、猛暑の中でも楽しんでもらえるように、ホームビジットでは言語の壁がある中でどうやって村人と溶け込んでいけるようにするか、という課題を自分の中で作り、2週間過ごそうと思っていました。

ホームビジットで心に残っていることは、個々の話はもちろんですが、どの村人もLiposos（政府の援助がある敷地）から離れて独立した生活を送りたいという思いを持っていることに驚きました。Lipososでは、調味料やお金の多少の援助はあるが、個々の畑を持つことはできないと言っていました。一人で畑はきついけど自給自足はみんな望んでいるものだということが分かりました。また、一昨年にナンガットという村に行った時も思いましたが、村人達は過去に隔離や差別などをされ、つらい日々を過ごしたのにもかかわらず、私たちにこんなに優しくしてくれる、これはどの村に行っても共通することなのだと思います。

またワークに関しては、村人と協力し1週間ちょっとで完成させることができました。村人とキ



キャンパーとの団結力が早く終わらせるカギになったのではないかと思います。また、その村人との団結力を深められたのは、言語の壁を越えたコミュニケーション能力をみんなが持っていたからだと思います。けが人もいなく、安全でかつ楽しいワークをすることができました。メインのワーク後は新しいモスクを建てるということで、村の男性が集まり総勢20人近くの方が一致団結をして作業に取り掛かっているのを見て、この村の団結力はすごいなと感じました。また、奥さんたちは揚げ物や飲み物を準備して持ってきていました。男性20人くらいの中に参加した私でしたが、皆さんすごく優しく「女の子なんだから軽いものもちなさい」、「暑いから飲み物飲みなさい」、などと気にかけてくれました。この環境をもっとみんなに共有できたらよかったのと後々反省しました。

今回2週間のキャンプを終え、GLとしてやるべきことを自分ではできたのかはわかりませんが、日本人キャンパーとインドネシアキャンパーとかけがえのない素敵な思い出と経験ができたのではないかと思います。今でも連絡を取り合う中になれていますし、個人的には全体的にいいキャンプになったのではないかと考えていて、とても満足しています。ですが、満足で終わってしまえば、次につながらないのでしっかりみんなでも反省するところはして、余韻に浸る時は浸って、次のキャンプがより良いものになるように繋げていけるようにしていこうと思います。

約2週間、共に過ごせたキャンパーみんなに感謝です！ありがとうございました！

Misaki

インドネシアキャンプを終えて私が一番実感したことは、ドノロジヨの村にはあって日本にないもの。逆に日本にはあってドノロジヨにないものがあるということだ。この村は、そもそも差別が存在しなければなかったのかもしれない。しかしながら、村人たちは現実を受け入れ助け合いながら生きている。私たち日本にはない以上の協力体制が何度も見受けられた。例えば木を切るにしても日本のような巨大な重機はないが、男の村人たちが30分もかからないうちに作業を終える。私たちキャンパーが風邪を引いたら、夜ねれなかったというほど心配をしてくれる。国も違ういきなり来た私たちをあんなにも温かく迎えてくれるのは、過去のキャンパーのおかげであろう。また、この村人は人のことを思ってすぐに泣く。なぜ一度他人から差別を受け傷ついた経験のある人々はあそこまで心が綺麗なのか。そう考えてしまうほどであった。私たちが村に行き、現地の人々と交流をはかる。このことは啓発運動につながったと知っても、自己満足の部分があるのではないかと行く前に思うこともあった。実際に村人の生活に足を踏み入れ、聞かされたくなかもしれない質問をし、なぜ私たちが受け入れら



れるのか。どうして村人は別れる際、実際に生活を豊かにしたわけでもない私たちを思い泣いてくれるのか。無力に近い私たちができることは、この経験を 1 人でも多くの人に伝え、何よりも差別のない世の中を作ろうと努力をしていくことだと思う。

Miu

私は今回インドネシアにあるドノロジョ村でワークキャンプに参加しました。そこでワークとして道路脇に溝を作ったり村での行事に参加させていただいたりしました。

ホームビジットでは本当にたくさんの貴重なお話をしてもらいました。訪ねた村人の生い立ちや今の村での生活について、私たちの先輩方のお話などです。インドネシア語から英語、そして日本語への翻訳なので十分に理解できていないところもあります。インドネシア語で直接その言葉や思いを受け取れるインドネシアキャンパーが羨ましかったほどでした。ですが、表情や声のトーンなどで悲しいこと、辛かったことを語ってくれているのが伝わってきました。それと同時に、キャンパーを受け入れてくれて笑顔を浮かべてくれたことに安堵していました。来て良かったと思った瞬間でした。村の人たちと笑顔で会話できたときにはとても楽しく、村での生活も忘れられないものになりました。

私はハンセン病の支援でこの村に来ていて、ハンセン病がどのような病気かを知っているからこそ、村人たちと楽しく接することができました。しかし、ハンセン病を必ず移る病気だと信じ込んでいたりその見た目を怖がっていたりしたら、村の外の人たちのように間違いなく差別の加害者になっていると思うと、複雑な気分でした。実際に接していることで“ハンセン病の村の人”ではなく、ハンセン病という個性を持った一人の人間である、ということを感じることができました。



私たちが村を出る日に、お世話になった一家が引っ越しをしていました。トラックに家具が次々と積み込まれて運ばれていきました。また、私たちが村を離れた後に舗装された道路の写真が送られてきました。村での生活で何度も歩いた砂利道でした。その写真を見てこの村もずっとこのままあるのではなく、私が日本で日々を過ごして変化していくように村の様子も刻一刻と変わっていくのだと気づきました。今の村人たちや子供たちのために出来ることは何だろうと考えたときに村の人が笑顔になってくれるようなことがしたいなと思いました。ハンセン病について現地の人たちに知ってもらったりインフラ整備のお手伝いをしたりするのが本当はよいのかもしれませんが、実際日本からそのような支援をするのはなかなか難しいです。

このキャンプについて説明するとき両親はハンセン病についてほとんど知りませんでした。当た

り前です。学校では教わっていないし、メディアで大きく取り上げられることも少ないからです。差別や病気といったよくない歴史はあまり広げられようとしません。だからこそ生きた体験談を伝えていくことが大切だと感じました。身近な人、例えば家族や友達に感じたことや見たことを話してハンセン病や現在のドノロジョ村について知ってもらうこと、そして興味を持ってくれた時に実際に参加できるような機会、活動を維持していくことが今の私にできるだと思います。

今回のキャンプで今まで考えもしなかったことを考えたり、参加しなければわからないことを経験したりできました。学ぶことが本当に多かったキャンプだったと思います。

このような貴重な体験を与えてくださったドノロジョ村の方々、支援団体、キャンパーの皆に改めて感謝したいです。

Aini

私はインドネシアキャンプがしたくて FIWC に入った。最初はハンセン病という言葉自体知らなかった。初めてハンセン病と向き合ったのは大学一年の時に岡山県にある愛生園という場所に行った時だった。元ハンセン病患者との話は貴重な体験だった。こんな歴史があったのか。こんなに差別されていたのか。衝撃だった。私がハンセン病を知らなかったように、この病気を知らない若者はたくさんいるだろう。インドネシアにも療養所があると知り、そこで生まれ育ったのに自国のことを知らなかった私は恥ずかしく思う反面、知らなければならぬという使命を感じていた。また貢献したいと強く思った。ドノロジョという村は初めて聞いた。遠いし、知らないし、怖いし、自分は何ができるのだろう、でもみんなに行ってくるって言っちゃたし、「やるしかない」という感情だった。ジャカルタはいろんなバイク、車、建物があって都会だった。その反面ドノロジョは道や公衆トイレの整備があまりされていない、不便なところがたくさんあったが、緑がたくさんあって動物もたくさんいて広々と、のんびりとしていた印象だった。日本で忙しく過ごしていた自分にとって

ここでの2週間は心が浄化されたように思う。きっとそう思えるのは素敵な方達に出会えたからだと感じる。ドノロジョの村で過ごしている元ハンセン病患者の方はとても心が広がった。「休む、食べる、寝る」常にこの3つを言っていて、私たちを孫かのように娘、息子のようにすごく大切にしてくれるのだ。その温かい心が魅力的だった。ハンセン病にかかった時のことや、昔そのせいで仕事ができなかったこと、家族と離れないといけなくなってしまうことを聞いて、辛い過去があったのににもかかわらず笑顔で接してくれるのはなぜなのだろうと思った。本当に彼らを私は尊敬している。私たちが日本に帰る時に涙まで流してくれるのだ。私たちの活動は、道を作ること、ボランティアをすることなのに、私たち



が救われた気がするのだ。不思議な感覚だった。まさか、こんな日本から遠い場所で大切なものができると思っていなかった。ボランティアは仕事だけをするのではないと思った。目に見えない何かを作り、支え、繋がり合うのではないかと思う。

Nayu

私は、キャンプに参加するのが初めてでしたが、ワークキャンプに参加して、村での生活、村人との触れ合い、インドネシアの文化、宗教など、出会うものすべてが新鮮で、貴重な体験をすることができました。

ワークでは、みんなで道路わきの水路の整備を行いました。炎天下で重いセメントや土を運んだり、地面を掘り起こしたりするのはとても大変でしたが、職人の方や村の方は当たり前のように作業を進めていて、とても驚きました。彼らの生活において、生きていくために肉体労働は日常的なもので、村の方たちの精神的、肉体的な強さを感じました。

ホームビジットでは、村の方とお話をしたり、お菓子をいただいたりして楽しく交流を深めることができました。ホームビジットを通して、村の方々の過去のハンセン病についてのお話を聞くこともできました。闘病がとても辛かったり、病気への偏見により悲しい思いをされたりした方が多く、それでも、今は村の皆で協力し合って生活していて、よそ者の私たちにまでも大変親切にしてくださって、心の広い方ばかりでした。お互いが話している言葉はわからなかったけど、村の方との交流はとても暖かく、言葉以上に大切なものを感じました。



ワークキャンプを通して、得たものもたくさんありますが、同時に自分ができることが少なくて歯がゆい思いをしたり、力不足だと感じたりした場面も多くあったので、言語の、FIWCとしての活動への意欲にも繋げることができたと思います。

Shunsuke

僕にとって、今回のインドネシアキャンプは本当に貴重な経験になりました。行く前は、自分に何ができるのかピンともきていませんでした。ハンセン病による差別のことについても正直はっきりと分かっていなくて、漠然と何かを掴めるんじゃないかと思ってインドネシアに向かいました。村に着いたらすぐに自分たちを迎え入れてくれる村人がいて、なんだかとても安心しました。みんな温かい人たちばかりで、僕はありのままに村での生活を楽しめました。でも、そんな生活に慣れてから色々なことが気づきはじめました。多くの村人が病気というだけの理由で

ドノロジョ村にやってきたということ。そして、素敵で笑顔で接してくれているけど、過去には辛い体験をされていること。そう感じてから、自分がこの活動をしている意味を考えさせられました。それから、キャンプ中はとにかく村人との交流を大事にしようと心がけました。やりきれなかったこともあったりして、悔しい思いもしたけど、行動を起こすことができたときに、初めてボランティア活動の本当の良さを感じられた気がして、なんだかとっても嬉しかったです。

村人たちはたくさんの愛を僕たちに与えてくれました。いつも温かく接してくれて、別れる時には涙を流してくれて。差別や辛い体験をたくさんされてきたはずなのに、遠くから来た見ず知らずの自分たちに愛をくれました。それは決して簡単なことじゃないと思います。その恩返しになるかは分からないけど、僕は少しでも多くの人にハンセン病という病気を伝えていけないと強く思うようになりました。これからのFIの活動を全力で頑張ろうという思いにさせてくれた蜜の濃い3週間になりました。



Kaisei

2019年夏、Donorojo村で行われたワークキャンプは、みんながそれぞれ“あなた”を想い、“あなた”を笑顔にしたい、という気持ちを持った温かい素敵なキャンプだったような気がします。“あなた”はDonorojo村の方々かもしれない、インドネシア人キャンパーかもしれない、日本人キャンパーかもしれない、誰かはわかりませんが、みんなが常に自分以外の誰かを大切にしていた気がします。そこには、「どこで生まれた」とか、「どんなバックグラウンドを持った」なんてものは全く関係ありませんでした。大好きな“あなた”を想うだけです。

「ハンセン病快復コロニー」って言葉を聞いてどう思うでしょうか。ひょっとしたら大学入学前の自分も、あまり良い印象を持っていなかったかもしれません。純粹に「怖い」とか、そんな印象を抱いていたかもしれません。

でも、行って見て思ったこと。とにかく村にいた2週間は楽しかった。朝起きて、家に挨拶回りして、昼はワークして、夜ご飯の後は、また家に行く。朝から夜まで、ずっと村の方々と一緒にいる生活。いつでも村の方々は笑顔で自分たちを受け入れてくれる、そんな2週間で幸せで幸せで幸せでたまりませんでした。「ハンセン病」なんてバックグラウンドは全く関係なかったのです。家に遊びに行ったら、優しく迎え入れてくれるおじいちゃんです。日本に帰ってきてもLINE電話しているくらいです。はやく会いたい。はやく村に戻りたい。ほんとにそう思います。

村の方々からも、キャンパーからも、沢山の“幸せ”と“笑顔”をもらった今年のワークキャンプを終えて、今は「自分がどれだけたくさんの人を“笑顔”にできるか」を考えているところです。

Donorojo 村の方々、キャンパーのみんな、キャンプに関わってくださったすべての方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。Terima kasih banyak.



Ami

私は、今回のインドネシアキャンプは、私の人生観、価値観を変えるような大きな経験になりました。

まず、日本にいるときにハンセン病について勉強して予備知識は蓄えました。しかし、自分がどうやってハンセン病快復者と関わっていくのか、というところについて、あまり想像することができませんでした。

しかし、村に行くと、村人はあたたかく私たちを迎え入れてくれ、自己紹介をするとすぐに名前を覚えてくれて、すぐに仲良くなれました。この時は普通に何も変わらない村だなと思っていました。“ハンセン病快復者”のようには見えませんでした。

私が最初に、ここは本当にハンセン病快復村だと実感したのは、一番初めにホームビジットをしたときでした。トゥキさんという人で、その人は義足をつけていました。ハンセン病について話を聞いて、差別を受けた過去、村に住み始めたときのことなどを教えてくれました。その話を聞いて、村人たちは辛い思いをしてきたはずなのに、私たちにとても優しく接してくれるのはなぜだろうと考えました。その辛い思いを知ってるからこそ、他の人には同じ思いをさせないようにしているのかなと考えました。村人たちはとても強いと思いました。このことから、私も自分がされて嫌なことは他人に絶対しない、自分がされてうれしいこと、笑顔になれることをしようと思いました。また、私は途中体調を崩して、3日間入院しました。そのときも村人はとても優しく、お見舞いに来てくれたり、マッサージをしてくれたりしました。たった1週間前に出会った私のことを、本当の娘のように思ってくれました。その愛が強く伝わってきて、村人のために何かしてあげたいと思いました。このキャンプでの村人との出会いは、日本では得られないものだと思います。



自分はボランティアをしに行き、自分が元気を与えて、村人を手伝ってあげる活動だと思ってました。しかし実際にボランティアに行き、村人からたくさん大切なことを教えられました。村人のような生き方を真似したいと思いました。この経験は本当に貴重なものだし、これから先の生き方にも影響を与えてくれると思います。村人にまたおいでと言われたので、もう一回春に会いに行きたいです。そのときは、もっと成長した自分になって、村人に恩返ししたいです。

Ryosuke

今回のキャンプの期間の3週間の間で、私がオームシックに陥った時に会った村人の話を綴ります。私は海外が初めてだったので、インドネシアに渡航するとすぐにホームシックになりました。もちろん、水路の建設や村人訪問などの活動は充実していましたが、やはり、自由時間など、一人になると、どうしても虚無感が押し寄せ、精神的に参っていました。そんなある日、村人訪問で訪れた家に住んでいるおばあちゃんと出会いました。そのおばあちゃんは、私の事情を察して、家族と連絡が取れるように、インターネット設備を心よく、貸し出してくれました。そして、おばあちゃんは初対面の私をたくさん励ましてくれました。また、帰り際に「また使いに来ていいからね」と言ってくれました。その日、私は、心がとても軽くなりました。家族と連絡が取れたこともそうですが、おばあちゃんの優しさで温かさに触れられたことが一番の要因だと思います。その日を境に、そのおばあちゃんの家を頻りに通うようになりました。最初は家族と連絡が取れるからという理由でしたが、回数を重ねる度に、おばあちゃんに会いに行くことが目的になっていました。そんなおばあちゃんの家族もハンセン病を患っていた過去があります。ハンセン病を患っていたのは、おばあちゃんの夫で、今では病気も完治しているそうです。しかし、病気の後遺症から、容姿が少し変わってしまうので社会的に嫌悪されてしまいます。ドノロジョ村にはそのような境遇の方たちが多く住んでいます。ここからは活動を通して感じた持論ですが、ハンセン病を患い、その後完治しても社会復帰が出来ない状況が続くのは、人々が無知であることと、その人達と関りが無いことが関係していると思いました。ハンセン病は治療法が確立しており、今では感染することがほとんど無いという事実があります。それにもかかわらず、多くの方が自分にも感染するのではないかと憶測を立て、関係を拒みます。また、事実を知っていても、容姿を嫌い、恐れて関係を拒みます。理屈は、わかりやすく例えると、人が幽霊を怖がるのと同じです。人は、幽霊のことは存在だけしかわからず、幽霊による災いや幽霊そのものを恐れます。しかし、ハンセン病の場合、事実を知れば怖くなくなりま

す。患者は幽霊ではなく、人です。気持ちを通わせることができます。そうすれば健全者との違いは大したことではないと思うことができるでしょう。私も、村の方達と仲良くなることで、ハンセン病に対して、知識だけではなく、その人への理解も深まりました。ハンセン病の方達は社会的差別を受け、人との関わりを控えてるようです。そういった人達が怖いからという心理もどこかにあるのだと思います。そう考えると、私たちは、ハンセン病を患っている方たち、または、その回復者の方たちの理解者である必要があると思います。





2019 Summer Donorojo Work Camp All Campers

LCC Indonesia

- M Farid Alfa Rizki (General Leader)
- Aditya Sulistyaningrum (Work Leader)
- Devi Afithasari (Account Leader)
- M Heru Geofani
- M Khansa Dwiputra
- Annisa Zahra
- Lulu Larasati
- Fatima Baria
- Izzati Rafidah
- Khairunnisa
- Vera Tantia Kinanti
- Sannia Athira Tyanda
- Putri Meliana

FIWC 九州委員会

- 久保海晴 九州大学 4 年
- 久保山亜美 西南学院大学 2 年
- 上田涼介 西南学院大学 1 年

FIWC 東海委員会

- 加藤葉月 南山大学 3 年
- 松浦美咲 淑徳大学 3 年
- 山内未有 南山大学 3 年
- 久保田奈優 南山大学 2 年
- 後藤ヒカルアイニ 南山大学 2 年
- 束村俊輔 南山大学 1 年

